

勝連城(国史跡, 世界遺産, 続百名城)(沖縄県うるま市)

城は勝連半島の南の付け根部にある丘陵に位置する。南城（ヘーグシク）、中間の内、北城（ニシグシク）で構成されている。北城は石垣で仕切られた一から三の郭が階段状に連なり、一の郭が最も高く標高約 100m の丘陵上にある。

13 世紀-14 世紀に茂知附按司により築城されたという。この城の最後の城主が阿麻和利である。阿麻和利はクーデターを起こしてこの地方の按司となり、琉球の統一を目論んだが 1458 年に琉球王府によって滅ぼされた。

城内からは中国、元代の陶磁器（染付）が出土しており、『おもろさうし』からも当時の繁栄をみることができる。

城壁の石は道路工事の石材などとして持ち去られたが、現在は復元工事により往時の姿を取り戻しつつある。

1972 年（昭和 47 年）5 月 15 日、国の史跡に指定された。2000 年（平成 12 年）11 月首里城跡などとともに、琉球王国のグスク及び関連遺産群としてユネスコの世界遺産（文化遺産）にも登録されている（登録名称は勝連城跡）。登録されたグスクの中では最も築城年代が古いグスクとされている。

2010 年（平成 22 年）、沖縄本島近海地震で城壁の一部が崩落する被害を受けた。

Wikipedia による

